「教養」のすゝめ

大学は専門教育と教養教育の両輪で成り立ちます。

なぜなら、複雑な現実社会の中で専門的知識はそのまま役立つものではないからです。

専門的知識は応用しないと、現実には、はまりません。

応用するために必要なもの。

それが教養です。

さらに専門教育は限られた一分野に徹するから専門。

世の中を生きていくためには専門だけでは偏ります。

そこでも教養は不可欠なのです。

福澤諭吉先生も言っています。

「決して字を読むことのみを勧むるに非ず」

『学問のすゝめ』の中の言葉です。書斎で狭い学問をしているだけでは駄目だということです。

社会的・実践的に、からだを動かして学ぶことまで含めた、広い学問の必要性を述べた言葉です。

福澤先生による「教養のすゝめ」と解してよいでしょう。

教養研究センターは慶應義塾における教養教育の力強い担い手です。

様々な授業を設置して、学部のしきりにとらわれない、教養教育の実践に取り組んでいます。

ぜひ、全体ガイダンスに参加いただき、履修の参考にしていただければと思います。

担当教員からのメッセージ

アカデミック・スキルズⅠⅡ
Academic Skills

レポートと論文の違い。
プレゼンテーションの仕方を基本から学びます。

法学部教授 片山杜秀

論文の書き方、プレゼンテーションの仕方を徹底指導。滅多にない授業です。大学の授業ではレポートを書く機会が増えます。3、4年生になると論文の執筆を求められることもあるでしょう。では、レポートと論文はどう違うのか。さらに内容を口頭で発表するときはどうするか。アカデミック・スキルズはそのスキルをみなさんに伝授します。

身体知
Learning Through Affective Experience and Active Participation

言葉と体を通して
全く新しい自分に出会ってみよう。

法学部教授 横山千晶

普段皆さんが読んでいる小説。それを声に出して読んでみたら･･･他者と一緒に議論してみたら･･･
絵や歌、体を使って表現してみたら･･･。ふだん私たちが「学び」と思っていることを全く異なる方法で「体感」してみる授業です。

生命の教養学
The Liberal Arts of Life

「生命」を巡って各界の第一線で活躍する講師が登壇。
最先端の議論に触れて「生きる」ことへの認識を深めませんか。

理工学部准教授 荒金直人

多様な研究分野で取り組んでおられる十余名の専門家の方々が毎回一人ずつ登壇し、それぞれの視点から濃密な議論を展開して下さいます。「生命」を読み解く多様な視点を経験して下さい。質疑応答の時間も充分にあり、毎回盛り上がると思います。

身体知・映像ⅠⅡ
Learning Through Affective Experience and Active Participation:from Language to Films

映画制作を中心に据えた
慶應義塾大学唯一のユニークな授業です。

法学部教授 佐藤元状

本授業では、学生、教員、ティーチング・アシスタント、ゲスト講師と、参加者全員で力を合わせて、年度末に一つの映画作品を作り上げます。この目標に向かって、演技、撮影、編集、脚本、監督など、映画制作のすべての仕事をオールラウンドにこなしていきます。

身体知・音楽ⅠⅡ
Learning Through Affective Experience and Active Participation: Historical Performance Practice of Music

歴史的音楽（器楽・声楽）を、
当時の演奏習慣に基づき演奏していきます。

声楽：商学部教授 佐藤望
器楽：経済学部教授 石井明

音楽は、身体を介在し表現され、歴史の中で常に、人間の知的な活動と連携してきました。この授業では、音楽を身体で表現することを通じて、歴史・文化の中の人間の生を追体験し、芸術に秘められた人間の生を、文学・歴史・思想等、多角的視点から見つめ直すことを目的としています。

アカデミック・スキルズⅠⅡ

知の基礎を築く

大学では「自ら考え、調べ、論ずること」が求められます。これは学問研究の出発点であると共に、長い人生を送る上で不可欠な「教養」という知的基礎体力を身につけるための基盤でもあります。そこでこの「自ら考え、調べ、論ずること」の体得を目指して、問題意識の喚起、具体的な問題発見に始まり、問題解決に至るまでに必要とされるさまざまな学問的・知的作業のためのスキルを身につけることがこの授業の目的です。多分野にまたがる複数の教員が担当しており、学生の自主性を尊重し、学生の知的関心を活性化させるための授業が展開されています。少人数セミナー形式の授業で、日本語3クラス、英語1クラスの合わせて4クラスが設置されています。年度末には、各クラスのメンバーが参加して、論文とプレゼンテーションのコンペティションが実施されています。

授業の特長

学部共通科目で少人数制
色々な学部、学年の学生との出会いや議論を通じて、多様な個性や価値観とふれあうことができます。

１クラス３名（原則）の教員が担当
複数の先生と接することで、複眼的思考や多様な解決手法を学ぶことができます。

１年のまとめの論文を「アカデミック・スキルズ学生論文集」として刊行
これまでに刊行された論文集は図書室で閲覧することができます。

慶應義塾大学日吉キャンパス学習相談員「学生による学生のためのダメレポート脱出法」（慶應義塾大学出版会、2014）

授業紹介

論文を書き、発表する。
全ての過程を系統立てて学んでいきます。

論文を書くためにはどうするか。テーマの選び方・絞り方。図書館やネット上での情報の探し方。論の立て方・進め方。結論の出し方。さらにそれを口頭でスライドを付けて大勢の前で発表するためには？それらのスキルを順々に系統立てて学んでいきます。大学で学問するためにも、社会に出てからも、末永く役立つ内容です。授業は少人数セミナーのスタイルをとります。塾生20名に対して教員3名というのが基本です。通年で履修してもらい、春学期にはまず4000字の論文を作成します。そして秋学期には、より本格的な8000字の論文を作成し、仕上がった論文をさらに口頭で発表する訓練を行います。年度末には各クラスから最優秀の論文と発表者が選抜され、2月に開催される大きなイヴェント、アカデミック・スキルズ・プレゼンテーション・コンペティションに参加してもらいます。この厳しくも楽しいコンペティションで、１年の幕がおります。

佐藤望（編著）・湯川武・横山千晶・近藤明彦
「アカデミック・スキルズ
大学生のための知的技法入門 第2版」
（慶應義塾大学出版会、2012）

論文コンペティション入賞作（一例）

経済学部 2年	妖怪ウォッチは長寿アニメ作品になり得るか
文学部 1年	谷崎の虚偽と三島の真実―マゾヒズムを通じて男性を考える―

プレゼンテーション・コンペティション入賞作（一例）

医学部 1年	Can we produce designer babies in Japan?: Analysis of rapid development in technology and concerns about gene modification
理工学部 1年	恋愛ソングの歌詞から恋愛観の変化を読み解く

学生の声

とても大変ですが、興味深い研究なので意欲をもって取り組むことができています。

理工学部1年
（2017年度受講生）

理工学部の入学ガイダンスの際にこの講座のことを知り、少人数形態での講座に強く興味を持つとともに、自分から主体的に研究を行う姿勢を獲得したいと思い受講しました。一番の魅力は講座を担当していただいている教員の数が他の授業より圧倒的に多いことだと思います。私の曜日の場合、チューターの方も含めて5名の教員がいるので、教員の方から様々なアドバイスを頂け、さらに、複数の教員の方から論文の添削を受けることができるのでとても有意義な講座となっています。他の講座のテスト勉強や実験レポートの提出と並行して研究を進めるのは大きな負担ではありますが、研究そのものはとても興味深く、論文執筆に関しても教員の方々が親切にアドバイスをくださるので、意欲をもって講座に取り組むことができています。とても大変な講座であるとは思いますが、講座を通じて、自分自身がとても忍耐強くなれたと思います。

相手を説得するために必要とされるスキルの基礎が身につきました。

法学部2年
（2017年度受講生）

大学に進学した後、自ら問題を設定し、論ずることは、教養の基礎であることを改めて認識し、履修するに至りました。講座には、様々な学部から、教養を身に付けたいという高い意識を持った学生が集まっており、共にディスカッションをすることで、自分一人では気がつかない考えや間違いを発見することができます。さらに20人という少人数の中で、5人もの先生がおり、学生と一緒になって議論をしてくださり、また適切な論文のアドバイスをして下さいます。本講座を通じ、自分で探し出した資料を、論文で適切に引用することの大切さを学んでいく中で、どのような文章が論理的なのか理解することができました。そして、実際に春秋別のテーマで執筆することで、論理的な文章をすらすらと書けるようになりました。また、全員の前でプレゼンテーションを行うことで、説得的なプレゼンテーションをするための知識を身につけ、それを実践する経験を得ることができました。

身体知

創造的コミュニケーションと言語力

私たちは体を通して生きている。それは当然のことですが、あらためてこの「身体」に注目した全く新しい学びの在り方を、自分たちで探っていくワークショップ形式の授業です。鑑賞する対象の芸術作品を他者とともに議論したり、身体ワークショップを通して解釈したりしてみると、どんな新しいことが見えてくるだろう。そこから自分たち自身が創作者になってみたらどうだろう。創作したものを他者はどう見るだろう。そんな経験をワークショップを通して、異なる世代とともに味わうことが「身体知」授業の醍醐味です。夏季休暇中の1週間を使って、集中的に通信教育課程の学生と通学生が、ともに活動するのもこのクラスの特徴。「学び」、「仲間」との新しい出会いのみならず、新しい自分との出会いが待っています。

2017年度の題材をとったジョー・ミノの短編集

授業の特長

全く新しい学びの体験
座学ではない、頭も体も総動員する授業です。

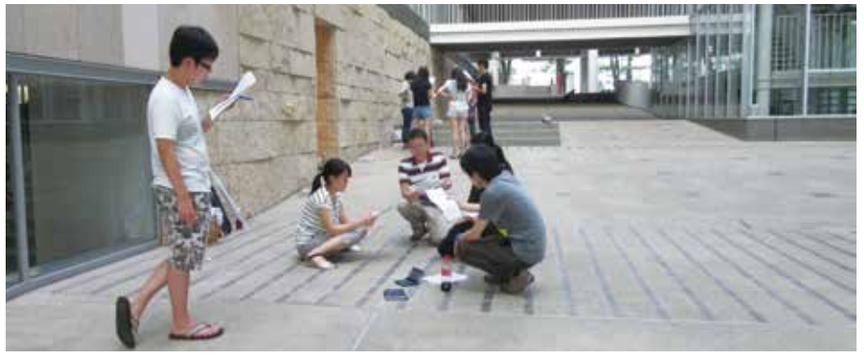
異なる世代が集う授業
通信教育課程の学生と通学生とが世代を超えて、ともに学ぶ場を共有します。

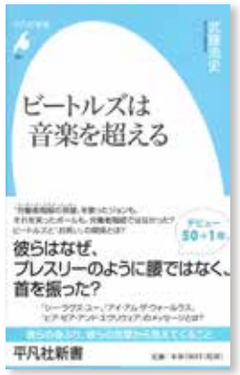
夏期集中コース
夏季休暇中の1週間を使った集中コースです。

授業紹介

言葉に命を吹き込んでみる。

通学課程と通信教育課程の学生がともに学ぶ授業です。いくつかの短編小説を「読む」・「声に出す」・「作品について語る」ことを通して、言葉が織りなす様々な意味を味わってみましょう。自分がそこから読み解くことが他者とどう異なるのか。声というものを通して文学作品を読むと、どう自分の解釈が異なってくるのか。直に体感してみてください。その後、様々な身体ワークショップを取り混ぜながら、創作へと向かいます。他者の話を「聴く」・「からだで表現する」・「言葉で表現する」といういくつかの段階を経て、そこでの体験をもとに、言語や身体を使った新しい創作表現へとつなげます。性別や年代が異なるクラス環境だからこそ可能になる授業を展開していきたいと思っています。最終的に成果を一般に公開するミニ公演を開催し、皆さんの作品を他者とシェアします。





武藤浩史
「ビートルズは音楽を超える」
（平凡社新書、2013）

近年のテーマ

2014・2016年度
ビートルズを読み解く

ビートルズの「音楽」の世界を、文学として読み解くことで、込められた世界観を新たな側面から解釈していきました。音楽と歌詞にとどまらず、詩や絵、写真、インタビューでの彼らの言葉、映画、パフォーマンスなど、様々な観点からビートルズを生み出した時代性にも迫りました。身体ワークショップによる、新たな表現も平行して行いました。最終的に成果発表会を行い、ビートルズから学んだ「自由」を表現しました。

2017年度
現実と非現実

今回は「現実と非現実」をテーマに授業を行いました。藤枝静男の短編小説「一家団欒」と、アメリカの若手作家、Joe Menoの"People Are Becoming Clouds"を題材とし、作品の朗読とディスカッションを行い、そこから各自の創作へとつなげました。朗読においても個人で朗読する、グループで身体表現を行いながら朗読する、などの複数のやり方を試み、その後でディスカッションを行い、新たな解釈を導き出していきました。

学生の声

ワークショップでは、ほかの履修者との距離が近づいていくのを実感しました。

法学部2年
（2017年度受講生）

今回授業で扱った二つの作品「一家団欒」、"People are Becoming Clouds"は共に、非現実を感じることのできる作品でした。普段本を読まないので、最初読んだときは難しい印象を持ちましたが、何回も読み、他者との議論をしていくなかで、自分の中に自分なりの解釈が生まれました。ワークショップでは、緊張をほぐすことができ、ほかの履修者との距離が近づいていくのを実感しました。朗読において面白いなと思ったことは、創作でもいいし、本の一部を読んでもいいということで、縛りがなかったことです。創作では、創った人の選んだ言葉からいろいろ解釈しながら想像でき、本の一部の朗読からは、読み方や抑揚などから、その人にしかできない表現方法をみることができました。発表会は、本当に楽しかったです。身体知の授業には発表会が不可欠だと感じました。授業を通して感じたことを自由に発表できる場は大切だと感じました。

生命の教養学

組織としての生命

2017年7月7日 鈴木晃仁氏

この授業は、「生命とは何か」、「生きるとはどういうことなのか」という問いから始まる知的探究への誘いとして構想されています。「生命」については、生物学を中心に主に自然科学に属する諸分野が「生命科学」として研究を進めています。しかしもちろん、哲学・文学・歴史学・文化人類学などの人文学、そして経済学や政治学といった社会科学も、それぞれ異なる角度からこの問いに係わっています。一面的に捉えるのにはもともと適していないこのような対象に接近するには、何が必要でしょうか。特定の学問領域に偏ることなく思考の材料を広く求め、とはいえ各領域の研究成果には充分な敬意を払い、そこから獲得された雑多な材料を元に新たな知の組織を工夫しようとする態度です。これを「教養」と呼ぶならば、それを皆さんが涵養するための材料と場を提供するのが「生命の教養学」の授業です。

赤江雄一(編)「食べる 生命の教養学12」(慶應義塾大学出版会、2017)

2013年4月26日 牛場潤一氏
高桑和巳(編)「性 生命の教養学11」(慶應義塾大学出版会、2015)

授業の特長

多彩な分野を代表する講師たちによって おこなわれるオムニバス授業

自然科学、社会科学、人文学など、多彩な分野のそれぞれ最先端で活躍している講師が週替わりで登壇し、濃厚な講義をおこないます。各講義では原則として1時間程度の講義後、自由な質疑の時間が設けられます。学期の最初と最後には、コーディネイターによるオリエンテーションと総括がおこなわれます。

2014年7月4日 長沖暁子氏

授業紹介

本年度のテーマは「組織としての生命」。生命は組織なのか、組織は生命なのか。

2018年度のテーマは「組織としての生命」です。ここでの「組織」とはorganizationのことです。生物学的な意味での組織は生命の条件であり、あるいは生命そのものであるとも言えますが、同時に生命をある枠の中に限定し、制限し、場合によっては破壊するとも言えるかもしれません。「生命」と「組織」という二つの概念を社会的・政治的な文脈に置いても同じことが言えるでしょう。組織は秩序を与えることで生命活動を可能にし、自由を制限することでそれを不可能にする、という訳です。生命とは組織的なものです。組織とは生命的なものです(組織も生きたり死んだりします)。そして両者の間には独特の緊張関係があります。2018年度は、多様な視点からこの二つの概念に意味付けをし、両者の関係を考えたいと思います。生物発生学、システム生物学、数学、組織マネジメント、スポーツマネジメント、人類学、昆虫の社会学、歴史、文学、政治思想、哲学などの専門家による講義を予定しています。

2016年6月24日 福田真嗣氏

2018年度「生命の教養学」出講講師

「生命体をつくるための細胞のルール」
堀田耕司(本学理工学部専任講師)

「生存戦略としての多様性」
坂内健一(本学理工学部准教授)

「スポーツ組織としての生命」
鳥海崇(本学体育研究所専任講師)

「企業組織の寿命」
山尾佐智子(本学経営管理研究科准教授)

「生命現象をネットワーク(組織)として理解する」
舟橋啓(本学理工学部准教授)

「昆虫の社会」
林良信 (本学法学部助教)

「生命体としての軍隊」
黒沢文貴(東京女子大学現代教養学部教授)

「現象と自由」
斎藤慶典(本学文学部教授)

予定、敬称略。肩書きは2018年1月現在

過去の開催一覧

2017年度 ● 「感染」　2016年度 ● 「飼う」　2015年度 ● 「食べる」　2014年度 ● 「性」

学生の声

一つの事象を多角的に深める 分野横断の学びの楽しさが、ここに。

商学部1年
(2015年度受講生)

オムニバス形式で、さまざまな方面で活躍されている研究者の方から、多角的な視座で講義を受けられることが魅力です。学習内容をインプットするだけでなく、関連付けて捉え直すことができます。2015年度の「食べる」というテーマにしても、グローバリゼーション、農業の現状、発酵食品、スローフード、肥満、エネルギーバランスなど、多彩な側面からのアプローチで、複眼的に、深く問題を考えることができました。
大学での教養科目の意義は「得た知識を関連させ、昇華させることで学問の楽しさに出会う」といわれますが、この連続講義を通じて、一つのテーマでも、ここまで多くの視点から思考を深められるのかと驚いたと同時に、回を重ねるにつれ蓄積された知識を活かして聴講できるようになりました。他の一般教養科目とも共通する学びを実感でき、分野横断の学びの楽しさに触れられました。

身体知・映像ⅠⅡ

物語映像を読む、創る

本授業の目的は、映像作品の創作を通じた「新しい言語能力」の習得です。新しい言語能力とは何か。文学作品を映像化するためには、まず物語の構造を読み解き（批評）、文字で表現されている物語を動きや発話に変換しなければなりません（脚本）。さらに、映像が観客に美的体験として届けられるためには、物語を実際に身体で表現し（演技）、映像言語を駆使した視覚表現として統合していく（撮影・編集）必要があります。ひとつの物語を、言葉、身体、視覚という異なる形式へ変換していくこと、それを、他の受講者とのコミュニケーションを通じて具体化していくこと。この過程のなかで、事物の複雑なありようを捉え、他者への想像力を働かせる、研ぎすまされた言語能力が身についていくはずです。

授業の特長

映像制作の経験は問いません
経験の有無を問わず誰もが持っている映像言語を掘り起こし、表現できるようになるプログラムです。

言語、身体、視覚など、多様な表現にチャレンジします
撮影や映像編集だけではなく、小説の読み解きやエチュードによる脚本づくりなど、様々な表現のレッスンを行います。

受講者同士のコミュニケーションを重視します
映像制作は、一人ではできません。受講者それぞれが自分の持ち味を活かした役割を担い、共同で制作を進めます。

第一線のアーティストを特別講師として招聘します
映像作家、脚本家など第一線のアーティストを招き、撮影手法や物語の構成など、専門的なレッスンを行います。

授業紹介

映像制作を通じ、チームワークを学び、
言語、身体、視覚をめぐる様々な表現に挑戦。

映画の制作を通じて、多様な言語能力の可能性を探る新たな授業です。映画や小説の読解、脚本制作や映像制作のワークショップを通じて、言語、身体、視覚をめぐる様々な表現に挑戦していきます。これまで、アイザック・アシモフ「うそつき！（I、ロボット）」（2014年度）、ポール・ブロックス「A-Z」、「鏡」（2015年度）、川端康成「非常」（2016年度）、川上弘美「なめらかで熱くて甘苦しくて」（2017年度）の映像化に取り組みました。受講者のほとんどが映像制作は未経験であるにもかかわらず、完成作品はすべて、見応えのある優れた映画作品となりました。観客の心に届く作品を作り上げるためには、物語構造の理解と映像言語の習得が不可欠ですが、この授業のなかで重要視しているのは、チームワークです。年度末に作り上げる映画作品には、映画制作に携わったすべての参加者の個性が刻印されることになるでしょう。これまでの自分の枠を超えた表現やコミュニケーションに取り組むことのできる、おすすめの授業です。

授業スケジュールの予定

春学期　オリジナルショートフィルムを制作

- 導入ワークショップ「1時間でつくる即興映画」
- 映画のラピッドプロトタイピング：脚本、エチュード、撮影、編集
- 映画の鑑賞と批評
- 映画制作の基本：制作の流れと脚本の書き方
- 演習：オリジナル脚本制作
- 演習：撮影と編集
- 上映会

秋学期　短編小説を映画に

- 小説の読み解き
- ゲストアーティストの作品上映会
- 演習：小説を題材とした脚本制作
- 演習：テストショットと絵コンテ制作
- 演習：撮影と編集
- 上映会

学生の声

映画を作る側が、どのような過程で撮るのかを学べます。

文学部1年（2017年度受講生）

映像を作りたい人が集まり、体系的に学べるため、前知識がなくても問題なく、いろいろな技術を習得することができます。今日、映像制作は誰でも触れることができるようになっていますが、作ると思うと、思ったより大変なものです。その体験を学べる良い機会です。

プロの指導で、演技の幅が広がりました。

法学部2年（2017年度受講生）

演じることが好きで、一度映像作品に出て、演技の幅を広げてみたいと思いました。プロの監督から指導をいただき、演技において細かな表情まで意識できるようになりました。映画が好き、物作りが好きな方は、絶対に後悔しない講座です。

違った視点で考えることで、個性を伸ばすことができました。

商学部1年（2017年度受講生）

先輩からのすすめで受講しました。講座では、本格的な機材を使って、本格的な映像作品に携われます。撮影する側の視点で考えながら、映像作品を見られるようになったのは、大きな収穫でした。

自分が役者をやるとは、1ミリも思っていませんでした。

文学部1年（2017年度受講生）

面白い授業をとりたいと思っていた時に、パンフレットで見かけて履修を決断。先生の個性が強く、受講者にもいろいろな人がいて楽しく学べます。まさか自分が役者をやるとは、まったく思っていませんでした。興味を持ったら飛び込んでみるべきだと実感しています。

身体知・音楽ⅠⅡ

—合唱音楽を通じた歴史的音楽実践—
—古楽器を通じた歴史的音楽実践—

写真提供：(公財)横浜市芸術文化振興財団

音楽を通じて歴史・文化の中の人間の生を追体験し、芸術に秘められた人間の生を、文学・歴史・思想等、多角的視点から理論的に見つめ直します。音楽演奏の実践体験によって、身体を通じた歴史・文化・言語の総合的な学習を行います。
器楽・声楽それぞれ歴史的音楽作品の演奏実践を行い、耳と感性知識、身体を結びつけ、それによって身体を媒体として継承される歴史・文化・言語の連関を実際の体験によって学びます。学期末に公開演奏会を行い、学内・地域に開かれたかたちで成果を披露します。

授業の特長

声楽アンサンブルと、器楽アンサンブルの2つの部門に分かれて行われます。

声楽アンサンブル部門

本格的なヴォイス・トレーニングを行い、古今の合唱音楽の実践を行っていきます。それぞれが自律した演奏者として、他者の音とリズムを感じ、感覚を研ぎ澄ませて、音楽を作り上げていく授業です。

器楽アンサンブル部門

バロック・ヴァイオリンやチェンバロなど、一般的に古楽器と呼ばれているバロック時代の楽器を用いて、17世紀および18世紀の西洋音楽を実践的に学んでいくというのがこの授業の最大の特徴です。

授業紹介

声楽アンサンブル部門

ここで行う合唱音楽は、皆さんが高校などで体験してきたものよりもさらに一歩上のレベルを目指しています。ときには、聞き慣れた混声４部合唱ではなく、6声、８声、ソロが加わったり、器楽アンサンブルが加わったりといった皆さんがこれまでに経験したことのないような、多彩なレパートリーも取り上げています。少人数のアンサンブルで重要なことは、一人一人の発する声が、それぞれ自律した音楽表現が可能になっていること、そして、それらが重なり合うことによって新しい音響的広がりを聞かせていくことです。それぞれの声の自律、音楽感覚の自律があって、美しい音楽を鳴り響かせることができるのです。そうした音楽創りを目指しています。そのために、まず、しっかりとした呼吸法、声の基礎トレーニングを行い、楽譜の伝えるメッセージを時代背景に注目しながら読み解き、それを音にしていきます。これを通じて、履修者の皆さんの音楽に対する意識・感覚が、新しいものとされていくでしょう。

器楽アンサンブル部門

バロック・ヴァイオリンやチェンバロの他に、バロック・ヴィオラ、バロック・チェロ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、バロック・オーボエ、リコーダー、フラウト・トラヴェルソ、バロック・ファゴットなどの、バロック時代に使われていた楽器を用いて、当時書かれた、トリオソナタなどの室内楽編成のための作品と、より大きめなアンサンブルであるバロック・オーケストラ(20人程度)のために書かれた音楽作品を取り上げ、バロック時代の音楽作品について深く理解していきます。実践を通じ、17・18世紀の作曲家たちが何を演奏者に、そして聴衆に求めていたのかということや、17・18世紀の器楽作品には、どのような音楽的メッセージが込められているのかということなどを、現代ではなく、当時使われていた楽器を用いることで探求していきます。なお、使用ピッチはa=415となります。一年を通じて、2回ほどの成果発表演奏会を、協生館藤原洋記念ホールで行う予定です。

この授業は、日吉音楽学研究室と
連携して行っています。
詳しくはホームページ
http://www.musicology.hc.keio.ac.jp/ を
ご覧ください。

学生の声

プロの演奏家の手法も学べる 古楽器を演奏する、貴重な経験も魅力。

文学部4年
(2015年度受講生)

声楽アンサンブルを通じて音楽の歴史的・理論的理解を深めるという内容を見て、以前から習っていたピアノへの理解にも繋がると考え受講しました。秋学期のはじめの頃のプロの演奏家の方々との合わせが印象的です。楽譜や歴史的・理論的な背景や、先生の要望に対して、日本に限らず世界で活躍されているプロの演奏家の方々が、どのような技術でこたえているのかを勉強する良い機会となりました。
授業の魅力は、古楽器とのアンサンブルやバロックの声楽アンサンブルの曲を演奏するという、普通の学生生活ではめったにできない経験ができる点です。自分が演奏しているときの音の聴き方が変わり、この講座を受ける前に習ってきたことの意味がわかってきたような気がします。具体的に言葉で表現できないので、ぜひ受けてみて、変化を体験してみてください。

ホールで発表する体験も貴重でした 古楽器から学んだ音そのものの美しさ。

文学部3年
(2015年度受講生)

受講を決めたのは、音楽を実際に演奏することで作品の特徴を知りその魅力を体感することができると考えたからです。古楽アンサンブルの授業を選択していますが、何よりも第一の魅力は古楽器を用いて演奏できるということ。そして室内楽、あるいはオーケストラの曲を演奏する中で先生から曲の理解、表現方法について適切に指導して頂けることが魅力です。そして何より、実際に自分たちも、毎年2回、ホールで発表するという貴重な機会の中で、様々な学年の受講生とともに演奏をする貴重な場で、良き音楽仲間に出会えるのも大切な経験になりました。この講義を通じて、古楽器の演奏を通じて音の純度、音そのものの美しさについて気づくことができましたし、発表の場が多くコンサートにも多少場馴れすることができるようになり、集団で演奏する上で必要なコミュニケーションを意識しながら楽しめるようになったのが成長を実感するポイントです。

Information

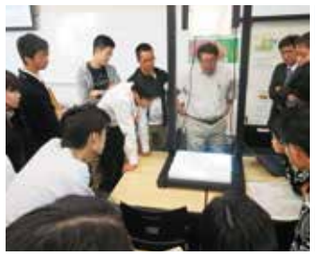
庄内セミナー　『庄内に学ぶ「生命（いのち）」－心と体と頭と－』

山形県鶴岡市にある慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を拠点にして開催している生命をテーマにした教養セミナーです。対話と議論を中心に据えつつ、専門家や地元の方々の話、体験・体感型プログラムを組み合わせた4日間、自然豊かな庄内の地で学部生・大学院生・塾員が一緒になって精一杯「生命」について考え、語り、体感します。即身仏拝観、修験体験、藩校・致道館での論語の素読体験、先端生命科学研究所ラボ見学など、過去・現在・未来が体の中を突き抜ける「学び」の場に立ち会ってください。

情報の教養学

現在、多くの人は、スマホやパソコンなどを用いて、様々な情報をインターネットから取得したり、発信したりしています。便利ではあるものの、情報漏洩やウィルスなどの危険があります。さらに、利用者のモラルも重要です。歩きスマホでさえ危険なのに、車の運転中にスマホでゲームをしていたため、事故を起こすケースが増えています。2018年度の「情報の教養学」では、「情報の光と影」をテーマに、情報の利用による様々なメリットと共に、気を付けなければいけない問題について、様々な分野の一流の講師に講演いただきます。

日吉学



「日吉学」はキャンパスの過去から未来へのメッセージを読み解こうとする体験型教育プログラムです。教材はキャンパスに存在する縄文時代の埋蔵文化財や1200種を越える生物や植物が生息する森、アジア太平洋戦争末期の帝国海軍の秘密基地や建築史上貴重な建造物等々。自然・地形・地理・ 歴史各分野の専門家の講義とフィールドワークやグループ発表を通して、多角的な視野と思考を鍛える文理融合のプログラムです。2017年度「縄文編」では「日吉縄文人認定書」が授与されました。2018年度は 「キャンパスの景観史」です。詳細は「日吉学」で検索！

学習相談

アカデミック・スキルズの修了生の有志が、相談員として学習に関するさまざまな相談を受け付けています。お気軽にどうぞ！

期間（予定）：4月23日(月)～7月20日(金) 13:00～18:00
場所：図書館1Fスタディサポート

寄附講座

教養研究センターに提供される寄附金を基に運営されている講座です。この支援によって実験的な授業を展開し、質の高い授業が正規化され、毎年着実に成果を重ねています。

※詳細はポスター、Web等でご確認ください。

Guidance（ガイダンス）

1 全体ガイダンス（教養研究センター設置科目ガイダンス）

4月5日（木） 時間 16:45～18:00 場所 日吉第4校舎独立館 地下2階 DB203

＊履修希望者は全体ガイダンスに必ず出席してください。

2 クラス別ガイダンス ※「身体知」以外は初回授業を兼ねています。

アカデミック・スキルズII —知の基礎を築く— 全4クラス

【 水曜日5時限クラス 】…… 4月11日（水） 時間 16:30～
【 木曜日5時限クラス 】…… 4月12日（木） 時間 16:30～
【 金曜日2時限クラス 】（英語版）… 4月13日（金） 時間 10:45～
【 金曜日5時限クラス 】…… 4月13日（金） 時間 16:30～

場所 来往舎1階 シンポジウムスペース

身体知 —創造的コミュニケーションと言語力—

【 夏期集中講座 】…… 4月 5日（木）全体ガイダンスにて説明

生命の教養学 — 組織としての生命 —

【 火曜日3時限 】…… 4月10日（火） 時間 ❶13:00～ ❷13:55～ 場所 来往舎1階 シンポジウムスペース（❶と❷の内容は同じです）

身体知・映像II —物語映像を読む、創る—

【 月曜日5時限 】…… 4月 9日（月） 時間 16:30～ 場所 来往舎1階 シンポジウムスペース

身体知・音楽II —合唱音楽を通じた歴史的音楽実践—

【 土曜日2時限】…… 4月 7日（土） 時間 10:45～ 場所 第8校舎811教室

身体知・音楽II —古楽器を通じた歴史的音楽実践—

【 土曜日2時限 】…… 4月 7日（土） 時間 10:45～ 場所 独立館 地下2階DB203

履修までの手続き

1 全体ガイダンスに出席
2 クラス別ガイダンスに出席
3 受講申込み
4 選考
5 結果発表
6 履修申告

1）クラス別ガイダンス（初回授業）に出席し、その際に氏名登録した学生のみに「受講申込」の権利を与えます。ただし、定員超過の場合は選考を行います。

2）選考結果発表で合格を確認した学生は、所属学部の履修案内に従って「履修申告」をしてください。

（＊履修する授業を、どの科目名で履修するかおよび単位の認定は学部によって異なります。所属する学部の履修案内などでよく確認した上で履修申告してください。）